

【作品タイトル】『ナハトムジーク』

【元にした作品のタイトル】『普請中』（森 鷗外）

【著者名】志賀 廣弥

【あらすじ】高校時代、瓜は、留学生としてドイツからやってきたリヒャルトと付き合っていた。彼がドイツに帰ったことで交際は自然消滅となり瓜のなかではよい思い出となっていたが、十七年振りに再会する。当時、よく遊んでいた渋谷の街で二人は会う。あの頃と変わった街で、変わらないものを瓜は思い出す。

【本編の文字数】4937字

朝まで続いていた雨は、瓜の目が覚めたときにはもう止んでいた。

それでもまだ道は濡れていて、夜の中に随分と降ったことがうかがえた。もう傘は必要ないかと窓の外を見ながら溜息をひとつ、瓜は出掛ける仕度をはじめた。

その街に行くのは気が重かった。どうして若いときは特に用もないのにあのごちゃごちゃとした街をただ何となく歩くことが出来ていたのだろうか。

昔だつてごちゃごちゃとしていたが、今のごちゃごちゃはとんでもない。駅から街中に出るのにどこをどう通つたらいいのか、行くたびに通路は減つたり増えたり常に変わり続けているし、建物もいつのまにか知らないものがそびえ建っているし、まるであの頃とは別の街のように感じられる。それは自分が、用がない限りこの街にめつたに来なくなつたからかもしれないし、実際に創りかえられて新しい街になろうとしているからなのだろう。待ち合わせ場所をどこにするか考えあぐねた結果、「明日の神話」の前にした。

ハチ公の前では人が多過ぎるし、モヤイ像はもうなくなっている。スクランブル交差点の先の建物の前でもいいけれどやはり人が多過ぎて、あそこに立っていることを想像するだけで疲れる。

スマートフォンが普及してから、消えた待ち合わせスポットは世界にいくつあるのだろうか、こんなに素晴らしくて大きな絵を全く見ない人たちが行き交うのをぼんやり眺めながら瓜は来る人待つ。

流れているもののなかで動きを止めていると、一体自分がどこにいるのか一瞬わからなくなりそうになる。自分が立っているのが、渋谷の商業施設のなかなのか、もしかするとこの絵のなかにいるのか、判然としなくなる。

激しい色彩から視線を動かして壁画の向かいの大きな窓硝子の方を見ると、そこにはこちら側とは違つてたくさんの人がいて、そこから見える街の様子を写真に納めたりしている。一体みんな何をしに来ているのだろうか、と興味もないのに思つてみる。自分だつて、誰かにそう思われているうちのひとりに過ぎないのに。

一昨日、そこにいるはずのない人に、ばったり会つた。

そんなことがあるものなのだと驚いた。驚いたのはお互い、その驚きよりも嬉しそうな顔を見せたのは向こうだった。瓜は自分が嬉しいのかどうかよくわからなかった。嬉しくないことはないが、その人はもう自分のなかでは遠くにある人で、まさかまた会うことがあるとは微塵も思っていなかった。

今、その人を待っているのも何だか不思議でならなかった。

リヒャルトは、瓜のクラスに来た留学生だった。隣の席だった瓜は自然、学校生活の面

倒を見るかたちとなり、好きな音楽が共通していた二人はすぐに仲良くなった。距離が近くなるのに時間はかからなかった。お互いの言語がはっきりわからなくても気持ちは何となくわかり、何となく付き合ひだした。瓜はドイツ語が全くわからなかったが、自分で勉強したりリヒャルトから教えてもらい、少し話せるようになった。

井の頭公園のベンチで池を眺めながらひとりでお茶を飲んでいた一昨日、急にドイツ語で話しかけられたとき、瓜は自分が話しかけられているとははじめ思わなかった。肩を叩かれ、顔を上げてようやく相手の顔を見たときに、それがドイツ語であることに気付いた。二十年ほどが経ち、あれ以来、全く勉強はしていなかったけれど、それでも意外と覚えているものなのだ。それにも瓜は驚いていた。

二言三言話していると、彼の名が呼ばれた。少し離れたところから若い女性が手を振っている。彼はそちらに軽く手を上げると、連絡するよ、といって手を差し出した。瓜は、曖昧に笑ってその手を握りかえた。本当に連絡をしてくるとは思ってもいなかったが、その日の夜、パソコンのメールアドレスに連絡がきた。

二人の付き合いはリヒャルトの一年間の留学期間が終わって彼がドイツに帰り、自然と終わった。彼が帰ってすぐはさみしくて泣いたこともあったし、お金を貯めていつかドイツに会いに行くと思っていた。向こうも、また必ず日本に来るといつていた。けれどそれは実現せずに、最初は頻繁にしていたメールのやりとりも次第に間隔があいていき、瓜のなかではひとつのよい思い出になって長らくしまわれていた。

「グルケ！」

彼以外に瓜のことをそう呼ぶ人はいなかった。今また、その声でその名を呼ばれていることの現実感の薄かったが、目の前には間違いのない懐かしい顔があった。その顔にあの頃の若さはもちろんもうなかったが、褐色の瞳はあの頃と同じだ。

今まで全く緊張などしていなかったのに、その瞳を見ると瓜は急に今の自分が彼にどう映っているのかが気になった。その呼び方、と笑ってみせると、彼は流暢な日本語で

「ドイツで呼んだら、きっと笑われるね」と相好をくずした。

グルケは、きゅうり、だ。英語だとウリはメロンだけど、ドイツ語だとなんていうの、と高校生だった瓜が自分の名前の説明を何とかドイツ語でしようとして彼に尋ねた。

ウリを知らなかったリヒャルトは瓜の説明を聞いて、それだとドイツ語ならグルケかもしれないといった。いつてから彼は自分でいったその単語に大笑いした。何だかよくわからなかったが瓜もつられて笑いがとまらなくなった。それから彼は瓜のことをグルケと呼ぶようになった。きゅうり、と呼ばれていると思うと何だかおかしいな、と不意に十代の自分が戻ってきて顔がほころぶ。

「タロウのこの絵は変わらずここにがあるんだね」

リヒャルトが絵を見上げながらいった。

「リヒャがドイツに帰る少し前に、ここに置かれたんだよね」

リヒャ、と自然と自分の口から出ていることに瓜は動じないように努めた。でも、それ以外に何と呼んだらいいのかわからず、すぐに肩の力を抜いた。

「その年から、ずっとこの街はごちゃごちゃがたがたしているよ」

瓜がそういって肩を竦めて見せると、リヒャルトは通路の向こうの窓硝子の方に瓜を促

してゆつくり歩き出した。二人で、駅前の人と建物でひしめきあっている景色の前に立つ。日本には？と瓜は聞いた。

「十七年振り。あれから初めてだよ、随分と経っちゃった」

見覚えのある、困ったような笑顔でリヒャルトは答えた。その年月が長いのか短いのか瓜にはよくわからなかった。わからないことばかりだなと思いつながら、そう、と頷いた。「吉祥寺で会ったときにいた子、ルイーゼっていうんだけど、グルケのことを話したら、今日ライブに来てくれるのをとても楽しみにしていたよ」

ルイーゼ、と瓜は口のなかでいう。

「メールで少し書いたけど、二年前から彼女のマネージャーをしているんだ。去年はロシアのライブハウスに行った。めっちゃくちゃ大変だったよ。今年は日本だから、少し気が抜ける」

そういつてリヒャルトは笑い、来年はアメリカに行く予定なんだ、といった。

「最近、全然新しい音楽聴いてなかったから、ごめんね、その、ルイーゼのこと全然知らなかったんだけど、そんなにあちこち行けるってすごいんだね」

瓜が前夜に調べてみると、ルイーゼのSNSのアカウントはすぐに見つかった。フォロワー数も多く、アップされていた短いライブ動画を見ると、とてもいい曲だった。ただ、リヒャルトに会うだけではこうしてひさしぶりにこの街まで来ることはなかったかもしれない。

「それに、リヒャは夢、叶えたんだね」

そういつてから瓜は自分の頬がかつと熱くなるのがわかった。夢を叶える、とかそんなことを恥ずかしげもなくいつてしまった、と何も恥じることなどないはずなのにどうしてか、恥ずかしさを感じた。リヒャルトは何度か頷いて、

「叶えられたのは、グルケに出会っていたからだよ」

とどこにも恥ずかしさを持たない笑顔でいった。

それから、着ていた服のポケットをがさごそとやると懐中時計を取り出した。

「スマホがあるのに時計も持つてるの、何だかいね」

「祖父のくれた時計なんだ。それに、時計だけじゃないよ」

そういうとリヒャルトはもう片方のポケットからアイポッドタッチを出して見せた。傷だらけのそれに瓜は見覚えがあった。まだ使ってるの、と驚くと、物持ちがいいんでね、と彼は得意そうにいった。

さっきまで窓から見ていた、はじまりも終わりもわからない渦のような人混みのなかを二人は歩いた。センター街の入口で、瓜は振り返ってタロウの絵を見ようとしたが、見えたのは反射するガラスに映ったびかびかと光る映像だけだった。

はぐれたら一生見つけられなさそうな人混みのなか、リヒャルトは瓜に手を差し出した。瓜は小さく首を振って、大丈夫だよ、と答える。その手を握ったとしても、きっと何の問題もない。ない、はずだ、瓜はそう思いながらも握らなかつた。

リヒャルトは全く気にしていないという笑みを浮かべて見せた。瓜は何かを誤魔化すように

「この街はずっと普請中だね」

と小さな声で呟いた。雑踏のなかでもその声が聞こえたのか、フシンチューとリヒャル

トの口からも漏れる。

ひとがひとを避けながら進んで歩いていかなければいけない、この街に瓜は溜息が出る。もう少し、のんびりと歩きたいと思うけれど、この街はそれを許してくれない、と思ってしまう。本当はそんなことはなくても、そう思ってしまうと、それはまるで本当のこのことのように思ってしまう。そこから抜け出すのは案外、むずかしい。

瓜にとつてまるで知らない街のように思えるのに、リヒャルトは十七年振りの、昔よりも人も多くごちやごちやとした道を迷わずに泳ぐように進んでいった。

いくつかの坂を通り抜けて辿り着いたライブハウスの前には、すでに何人ものひとが並んでいた。その横を申し訳ない気持ちで通り過ぎて、なかに入る。リヒャルトに促されるままに狭い楽屋にいくと、ルイーゼがいた。公園で見かけたときよりも小さく見える。

顔を上げ、瓜がいるのを見とめると、ぱつと顔が明るくなった。そのまっすぐな瞳に瓜は少したじろいだ。全く似ていないのはわかっていたけれど、瓜はそこに十代の頃の自分を見たような気がしたのだった。

ルイーゼは興奮したように早口のドイツ語で喋った。瓜には何をいつているのか半分以上わからなかったが、とりあえず歓迎してくれていることは伝わった。リヒャルトがなだめるように落ち着かせると、ルイーゼはすぐそこにあつた彼の腕をきゅつと、大事そうに掴んだ。

「来てくれてありがとう、って。今夜は日本の曲もやるから楽しんでくれって」

リヒャルトがルイーゼの言葉を要約して伝えた。瓜は笑顔で頷いてみせ、ダンケ、とルイーゼにいった。

一番前で見たらいい、という誘いを丁寧に断って、瓜は一番うしろで、その日のその場所の音楽のはじまりを待っていた。観客は次々と増え、はじまる頃には壁にびったりと背中を付けて立った。

定刻から十分遅れてステージははじまった。ルイーゼが片言の日本語で、挨拶をすると観客は口笛や拍手を返した。

フラグメンテ アイナー ベターグメンツ

「Fragmente einer Begegnung」

一曲目のタイトルをルイーゼが口にする。ドイツ語のあとに、聞こえるか聞こえないかの大きさを、デアイノカケラ、といった。よくあるようなタイトルだな、と瓜は思ったが、曲がはじまってすぐにその曲を聴いたことがあることに気付いた。

ルイーゼの声が音楽に乗り、その曲のサビに辿りつく頃には、この曲を知っている者たちの体が懐かしさで動いていた。知らない者も、その心地よさに身を委ねていた。

瓜は、泣いていた。

その涙が何の涙かはわからなかった。ただ、遠くにあつたはずの時間が今は目の前にあつた。それは、リヒャルトと一緒によく聴いていた音楽だった。いつか音楽の仕事をしたいんだ、といていた彼の姿を瓜は今、見ていた。

ルイーゼの声は妬ましいほどにやさしかった。瓜はその声に包まれて泣いていた。変わっていく街も、変わらない小さなことも、変わらない自分も、変わらない自分も、すべてを包み込まれるようだった。

ライブが終わり、本当だったら挨拶すべきなのだとわかっていたが、瓜はすぐに会場を

出た。

八時半過ぎの渋谷の街はまだ人で溢れていた。街は相変わらず知らない顔していたが、足元が数センチ浮いたような心地で急な坂道を駆けおりた瓜は、その浮力のまま早足で駅へと歩いていった。